

安全の鐘を鳴らし続けて

シンポジウム2024 ご参加の皆様
よろしくお願ひいたします



8、12連絡会事務局長 美谷島 邦子

いのちを織る会

安全には終わりがありません
安全は守るのではなく築き上げるもの

安全を測るのは
今までの**失敗や事故の数**ではなく

事故の痛ましい経験を知識として共有し
安全を守るために実践してきた数

1985年8月12日

August 12, 1985













突然の別れ

An Unexpected Farewell

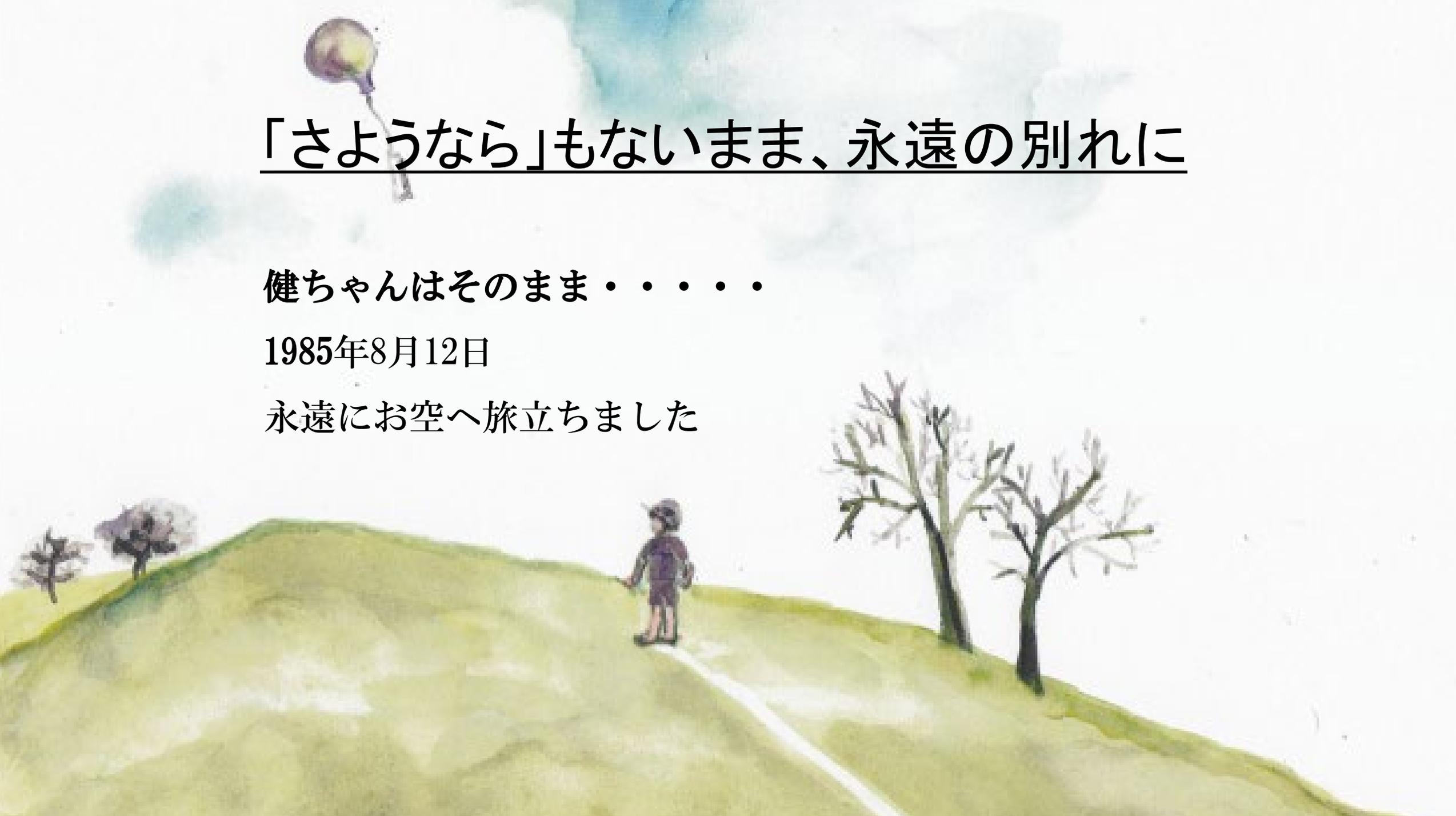












「さようなら」もないまま、永遠の別れに

健ちゃんはそのまま・・・・

1985年8月12日

永遠にお空へ旅立ちました

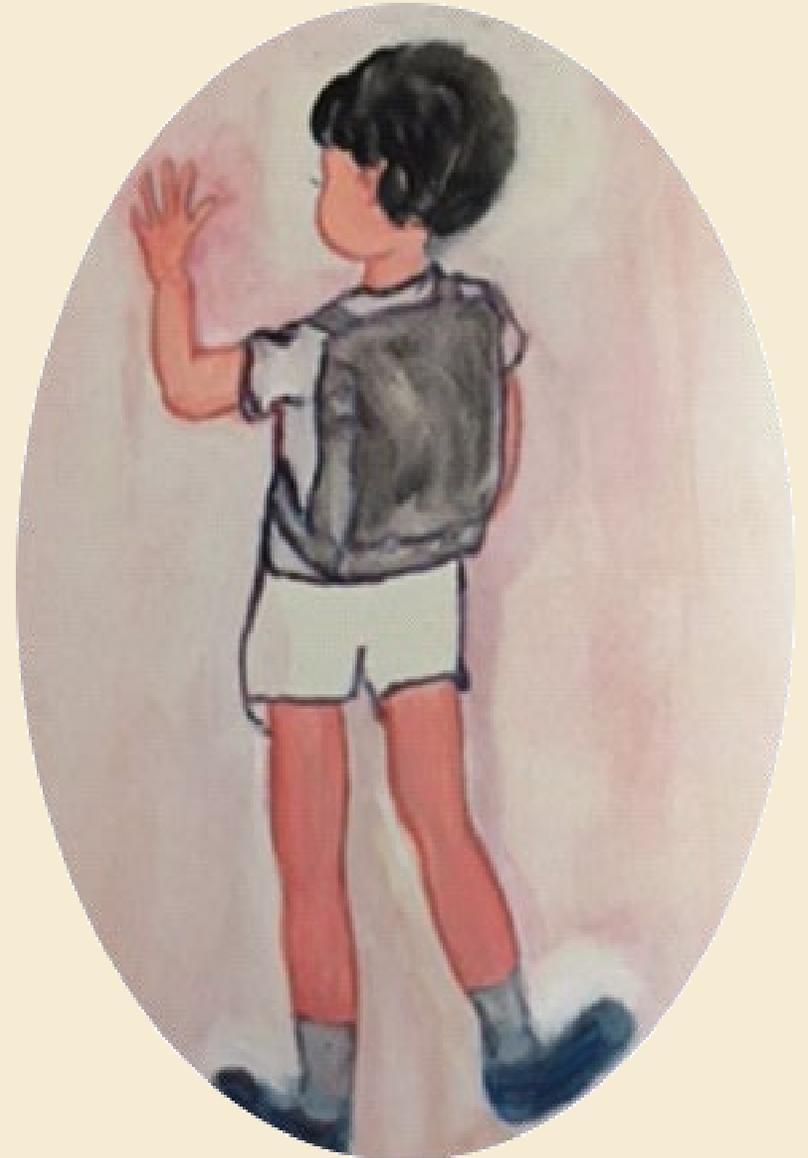
悲しみの衝撃

The Emotional Impact











8.12 連絡会

Liaison Group



8、12連絡会とは

御巢鷹山墜落事故の遺族が互いに支えあうことを目的に作られ、緩やかな連帯で結ばれた自助グループの会

失った肉親があの機内の同じ空間を共有したという絆

8、12連絡会とは

事故後の様々な対応で「もう遺族と呼ばれたくない」という気持ちで「連絡会」とした

遺族の枠を越えて世界の空の安全を促したいという固い決意

悲しみを、悲惨なだけの出来事
にしてしまいたくない

- 災害でも事故でも、どんなに技術が進んでも安全への最後の守り手は人間の意識でしかないと思う

悲しみを、悲惨なだけの出来事 にしてしまいたくない

- 利益や効率を優先することで、地道な安全対策の積み重ねが置き去りにされてしまうことがないように訴え続けてきた



乗員の家族たち

5人の客室乗務員の母たちは、どんな思いで、私の家に来られたのかそして、何を一番伝えたかったか今思うと、その計りしれない苦しみに心が凍ります





8月11日の灯籠流し

色のない世界に

Overcoming Loss





いつまでも いっしょだよ

作●画
みやじまくにこ



絵本「いつまでも いっしょだよ」



8.12連絡会は、**事故から1年目に**
遺族にアンケートをしました。

最愛の人を亡くした遺族達140人が回答をしました。

○事故後、自分も死にたいと思った人は、**66%**

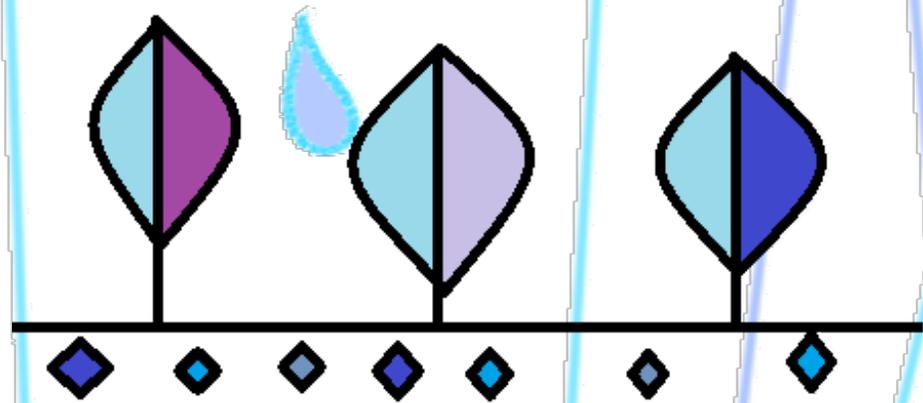
○事故を起こしたものに対する激しい怒りを感じた人は、**91%**

○心身の変調をきたした人は、**79%**

被害者を孤立させてはいけません。



悲しみはみんな持っている



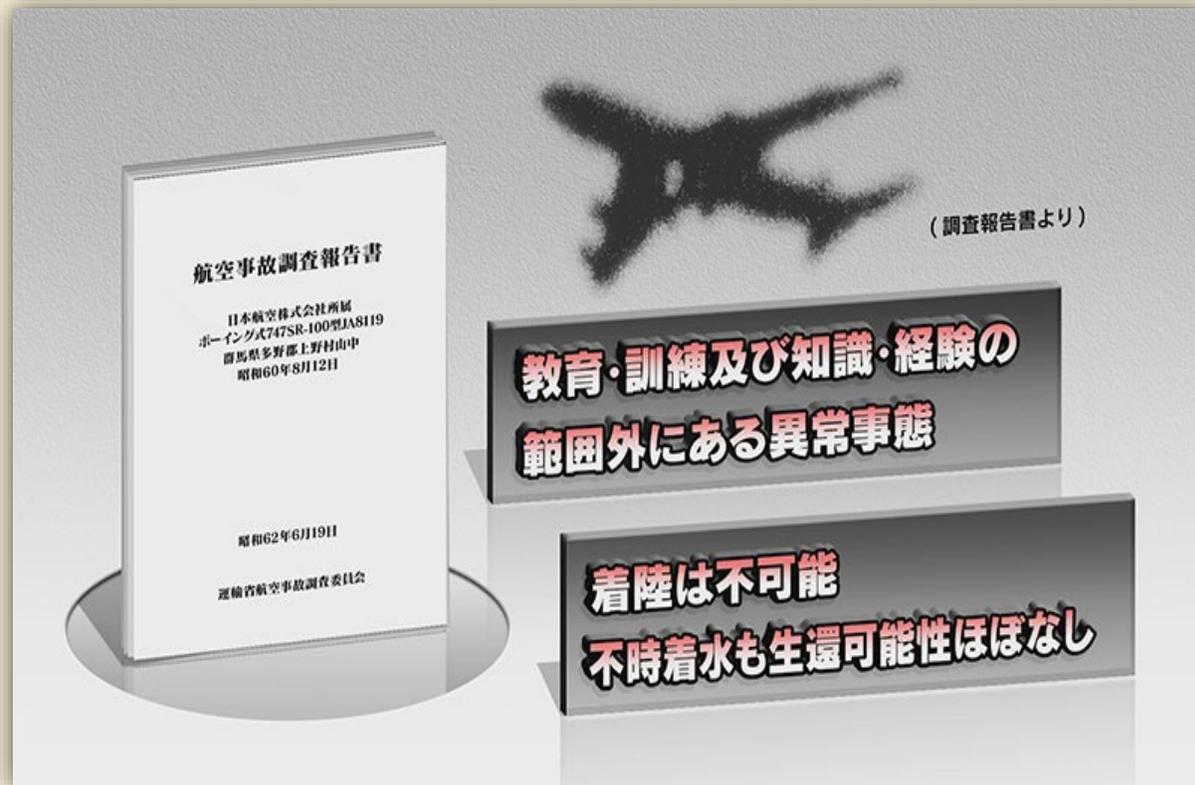
事故の調査報告書

The Investigaton Report

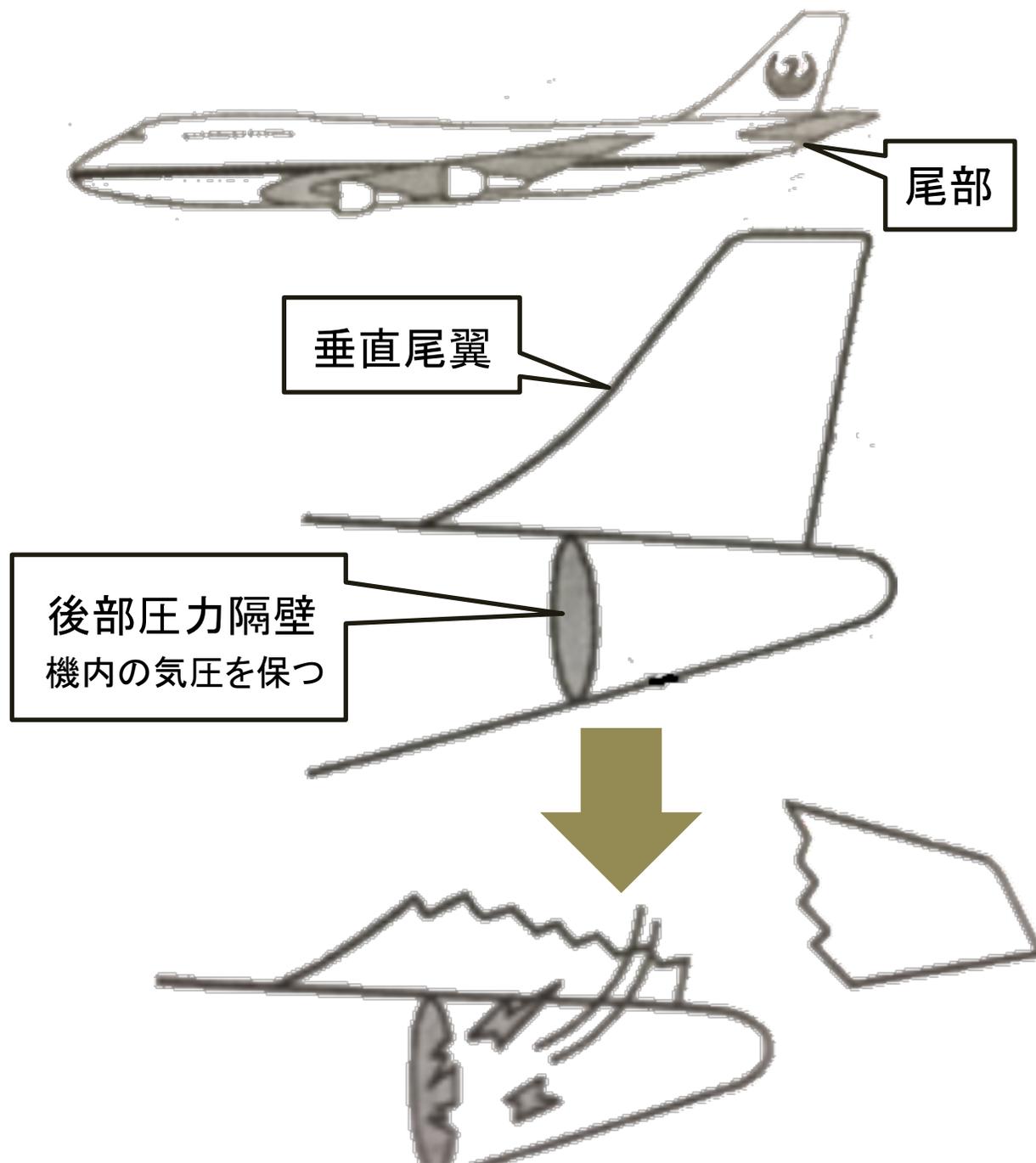


1987年6月：事故調査報告書が出る

健の墓標の前で、
報告書の内容を健に分かる言葉に直して伝えました。



飛行機が大阪まで飛べなかつた原因は





空の安全に時効はない

忘れてないで **あすたか**の大惨事

空の安全が**あぶない!** 8.12連続



家族支援・事故防止

Family Support and  Accident Prevention

事故調査と被害者支援は車の両輪

- 両輪の一つ、遺族は、何故亡くなったのか知りたい、原因究明をし、再発防止策を知りたい。それには、事故調査への国民の信頼を高めること。



- 両輪のもう一方は、事故後の被害者が、適切な情報を迅速かつ平等に得られ、経済的、精神的支援を包括的に受けられる社会のしくみを構築すること。

被害者支援について

About Victim Support



被害者を支援する組織が欲しいと8、12連絡会等の
被害者団体が長年要望してきた

アメリカでは、1996年にできた、航空災害家族支援法に基づき、支援組織や支援計画作られている

2009年、「公共交通における事故による被害者等への支援の在り方検討会」が国土交通省に設置された。私たち被害者も検討会の委員に入りました。

そこで、国が初めて大事故の被害者への初期、中・長期に渡って必要だった支援についてのヒアリングや調査をした。報告書は膨大なものとなりました。

被害者支援室

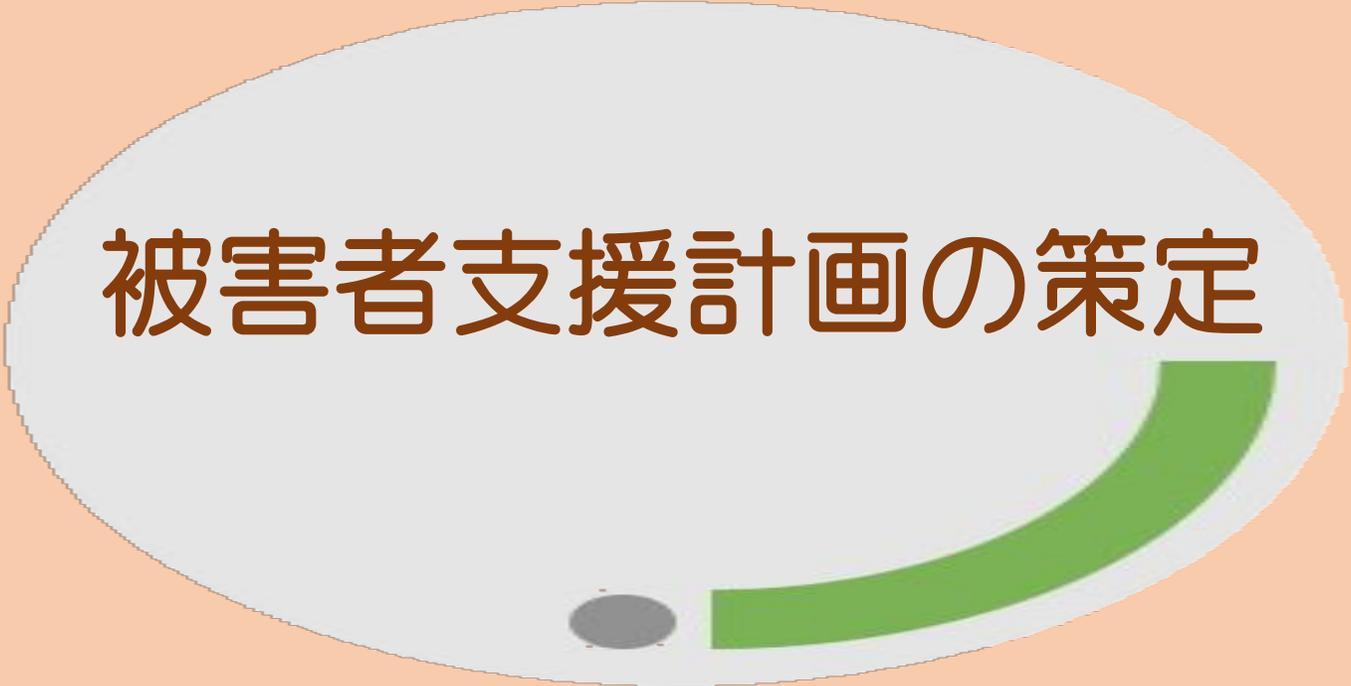
私たち事故被害者達が要望を続けた結果、
2012年4月、国土交通省に

「公共交通事故被害者支援室」が設置された
運輸安全委員会には「事故被害者情報連絡室」が設置

被害者支援室

国の役割は、被害者の家族に直接向き合い
情報を正しく迅速に伝えること。
要望を丁寧に聞き取り、関係機関に繋げること。
家族同士がつながるためのサポートもして欲しい。

被害者支援計画の策定



平素より事業者が被害者支援計画を策定し、
それに基づく訓練を実施。

事業者の信頼を高め、安心安全な社会を作る

過去は未来を作る鏡

組織事故の場合は、事故調査機関の権限を強化し、事故から学ぶための前向きな模索こそが、命を生かすと考えています。安全は祈つたり、願うものではなく、みんなで創っていくものです。

安全な社会を創るためには、真実を導き出すためのエビデンスを用いて、議論することです。それが、事故や死と向き合うことだと思えます。そして、過去は未来を創る鏡だと思えます。

安全啓発センターの役割

The Safety Promotion Centre



安全啓発センター



残存機体や遺品の展示の経緯

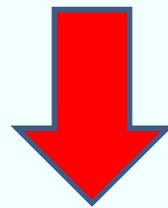
事故 1 年目から

- 8、12連絡会では、事故を忘れさせないため、毎年、残存機体の保存と遺品の展示公開を要望。機体残骸や遺品を活かしたいと考えた
- 会社は廃棄処分を主張

残存機体や遺品の展示の経緯

事故21年目、安全啓発センターを設置して

残存機体と遺品を展示



遺族のゆるぎない意志が大企業の姿勢を変えた

現物の前に立つと
語りかけてくる



安全啓発センター



安全は目には見えないが
安全でないことは目に見える



ライフベスト

ボイスレコーダー・フライトレコーダー



安全の扉を一緒に開けたい



信頼回復には

Restoring Trust



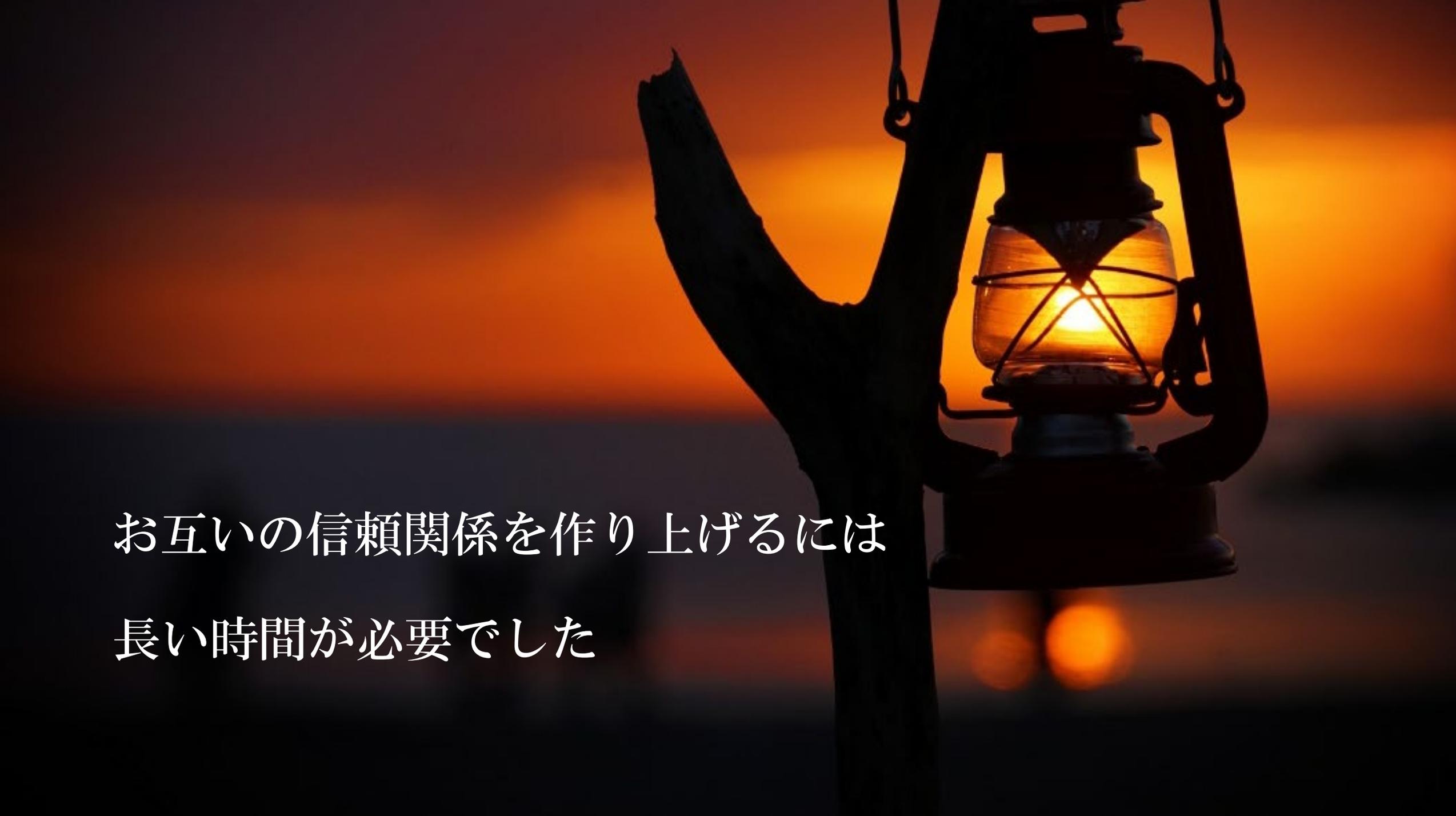
話し合う場所が何よりも必要

大事な人を突然失った時は、**自分自身の半分を失う**
といっても過言ではありません
そんな中、加害者が被害者への支援をすることはとても難しい

加害者、被害者双方への支援が必要



事故当時から使われている山小屋

A lit lantern hanging from a branch against a sunset background. The lantern is illuminated from within, casting a warm glow. The background is a soft, orange and yellow gradient, suggesting a sunset or sunrise. The lantern is the central focus, with its metal frame and glass chimney clearly visible. The branch it hangs from is dark and silhouetted against the bright background.

お互いの信頼関係を作り上げるには
長い時間が必要でした



様々な事故や災害で大切な人をなくした仲間たちと



2019年8月12日
御巢鷹山で



雨が降っているときは
傘を差しだすより
一緒に濡れてあげる







いつまでも
いつしよだよ





最後まで聞いていただき
ありがとうございました。

制作：いのちを織る会